



ドラゴンマウス

～復活の呪い・覆滅の祈り～

水島一輝

「マドリカよ。必ずアスワム国を復活させ、お前の手で繁栄させるんだ。頼んだぞ」

王の間。豪勢に装飾された王と王妃の椅子の背後にある石壁がぼっかり口を空けている。壁穴の奥は暗く、そこに王妃と使用人の女、そして娘マドリカはいた。マドリカにいたっては、寝間着姿のままだ。アスワム王は三人が出て来ないように入り口をふさぐようにして立っている。マドリカは悲愴の表情でアスワム王を見つめていた。

「お父様……」

マドリカは、グッと王妃の服をつかんで一粒の涙をこぼした。わずか十歳の女の子は大きな声で泣きわめくことはない。王はマドリカにそっと触れようとしたその時、男の低いうなり声と叫び声が響いて来た。さらにその声をかき消すように、王の間の大きく重厚な扉が突き破られた。マントをまとい、剣と盾を持った兵士たちが流れ込んで来た。

「ビロウ王！ 扉を打ち破られました。早く王妃たちを！」

内側で扉を守っていた王兵が敵兵に押さえ込まれながらも叫び散らした。

アスワム王は、ちらっと扉の方を確認する。すぐに向き直ると、王の表情には笑顔がみとれた。王妃、マドリカと順に目を合わせて、

「行け！」

と、一言。そして、壁穴の脇にある出っ張った石を押し込んだ。王妃たちは促されるように奥へと続く通路を走りだした。まもなくして細かい振動が始まり、その入り口をふさぐように壁が崩れて行った。しばらくその崩れる音が続いている。それは奥へと続く通路が崩れている音だった。

崩れたがれきの前で、がっくりと肩を落としたアスワム王は、突入して来た敵兵に剣先を向けられて囲まれた。

「ここまでだな……」

アスワム王は首を切られる覚悟を決めた。

「剣を下ろせ！」

敵兵の後ろから声がかかるとアスワム王に向けられた剣がすっと下ろされた。

「こちらを向いて下さい、アスワム王。いや、ドラゴン・ビロウ」

本名を呼ばれたビロウは、ゆっくり振り返ると黄色いマントをまとい、まだ若い好青年が立っていた。

「貴様がバナナ国の騎士、ブロス＝レステシュートか」

「いかにも。王血の者はビロウ王だけですか？」

ブロスは辺りを見回して言った。王の間にいたのは、ビロウ王と扉を守っていた兵士二人だけだ。すると、ビロウ王を囲んでいた一人の兵士が、

「突入と同時にその壁を崩していたのでおそらくそこを逃げてか」と

「そうか。ここはもういい。お前たちは逃げた王血の者らを追え。城の地下、城の裏手、水路、

近くの森に出てくる可能性が高い。探し出せ。俺はビロウ王と交渉に入る。行け！」

兵士たちは、「ハッ！」と、一言合わせて、王の間を走り出て行った。ビロウは内心焦りもあったが大丈夫だと思い続けた。兵士の駆け音がなくなるとやけに城の中は静かだった。外も騒がしくはないようだ。城が攻められてしまっているのに……。

「気づきましたか。アスワム国の民は、本当に物分かりの良い素晴らしい。それともこうなることを民に周知させていたのですか？」

「どうだろうな。そもそもなぜ、私の首をはねないのか？」

ブ罗斯は、勢い良くビロウの襟首を握りしめた。

「その必要がないからだ。何度も何度もバナナ国崩壊計画参加の呼びかけとその計画状を送ったにもかかわらずあなたはとことん無視をした。無視されても計画を実行すると最後の計画状に記した。だから今日、その計画、一血計画を実行した」

ブ罗斯はまくしたてた。

「……それが革命だ、若造よ」

ビロウがそういうとブ罗斯は手を放した。その手は震えていた。

この世界は、五つの大陸に分かれていて、あらゆる種族が陸地を分ち住んでいる。種族間、種族内での争いごとも少なくない。ここは中でも人間の住む一番小さな大陸で、アスワム国とバナナ国で二分されていた。特にバナナ国は封鎖された国として知られていた。大魔法族の血を引いたバナナ国王が自らの魔法で国を閉ざしてしてしまっていたのだ。

バナナ国王は三百年以上国を統治している。そこまで国を統治できているのは大魔法による他国を寄せ付けない攻撃力ではない。国の領土を、自分の身を守る強力な絶対防御魔法により、バナナ国への侵略、王の暗殺は全て失敗に終わり誰もバナナ国王を変えることはできなかった。国内外との交流も簡単ではない。国の中心にある城、街、湖、森、海、それらの広大な領土は、バナナ国王による円陣魔法で包み込まれていて勝手にその円陣から出ようものなら、神の雷をくらうことになる。どこにでも目があるようなものだ。もちろん、バナナ国の生活に自由はないが最低限の保障はされていた。けれど、そんなバナナの民は自由を求めている。隣国の規範のある自由に包まれたアスワム国が羨ましかった。民から信頼されているアスワム王思想のもとバナナの民は生きたかったのだ。

時にバナナ国王直属の騎士、軍部の長となったブロス＝レステシュートは、国王に見つからぬよう一年をかけて軍部と民を説得してきた。バナナ国を終わらせようと。アスワム国の統治下になればバナナの民はバナナ王の魔法から解放されると考えていた。十分な情報が民に行き渡ってから騎士ブロスは、外交の名目で書状を何度もアスワム国に送った。その書状には、バナナ国を終わらして統治下に置いて欲しいと。しかし、ビロウ王には受け入れられなかった。それは自国のことは自国で解決するよという意思表示であった。それでもブロスは、国を治める者はビロウ王しかいないと考えていた。自分たちの国にそのような器を持つ人物はいない。軍部の長になったとはいえ、軍を率いることと民を束ねることは意味も責任も大きく違う。民ですら隣国の王を欲しているのだ。それでもビロウは……。

そして、武力を行使してでもビロウ王をバナナ国の王になってもらおうと考えた。現バナナ国王を暗殺し、ビロウ王をバナナ国へと強制的に連れて来ようとした。血を流すのはバナナ国王のみ。アスワム国の攻撃は極力なくし城を速やかに鎮圧する他ない。これが一血計画である。

「お前が時代と国を変えたんだ。お前がバナナ国を治めても誰も文句は言わないはずだ」

「何度も言わせるな！ 時代を変えることと国を治めることは一緒じゃない」

ブ罗斯は怒鳴った。

「私は今、初めてお前の口からそれを聞いた」

「あれだけ書状に想いを託したというのに。ビロウ王！ 頼むからバナナ国の新しい王となってくれ。民の了承は得ている」

ブ罗斯は片膝をつき、頭を下げた。そして、二人の間にしばらくの間が空いた。互いに見つめ合い、心の奥底を探り合っているよう……。ビロウはすっと肩の力を抜いた。

「聞こう。バナナ国王の首はどうした？」

「バナナ城に安置しています。後ほどご確認していただければ」

「そうか……。書状通りならば、アスワムの民には手を出していないだろうな」

「もちろんでございます。一血のみです」

「政治も思想も私の望む通りでいいんだな？」

「無論であります。ビロウ王を望んでいたのは我々バナナ国でありますから……」

「……騎士ブ罗斯=レステシュート。別に試したつもりもないが、計画通り革命を起こし、目標とする私のもとまで来た。その計画力、兵の統率力、実行力、認めよう。望み通りバナナ国の王をなろう」

「ありがたきお言葉！」

ブ罗斯はまた片膝をついて頭を下げた。

ビロウは、娘たちを逃がしたがれきの下敷きになっていた布を引きちぎった。それは壁に掛けられたアスワム国の紋章だった。背中に羽のあるドラゴンが二足で立ち、天を向いて叫んでいるかのように大口を開けている様子を金色の糸で刺繍されていた。

その紋章を見ながらもの思いにふけるビロウに、ブ罗斯は壁に灯っていたたいまつを持って寄って来た。

「十万もの民を古よりまとめてきた話術とも言えるアスワムのドラゴンマウスは、今をもってこの地では口を閉ざすのです。しかし、これからはバナナ国のドラゴンマウスとしてバナナの民をお導き下さい」

ブ罗斯はそう言って、たいまつをビロウに向けた。ビロウは揺らめく炎の中にドラゴンの紋を入れた。パチパチと音を立てて燃えていく。かすかであるがドラゴンが鳴くかのように布が音を発して炎と煙を上げた。ビロウは、自分の手に炎が近づいてくると手放した。ゆらゆらとそれはがれきの上に落ち、炎はドラゴンの紋を包み込んだ。

「それではビロウ王。新しい城、バナナ城へ参りましょう」

バナナ兵が突き破った大扉から王の間を出ると騎士二人が見張っていた。すると、一人の騎士が口を開いた。

「城内の従者たちは全員避難完了しています」

「わかった。これからバナナ国へ戻る。最後のアスワム城に火を放て」

ブロスがそう言うと、騎士二人はたいまつを持ち、火のつきそうな所にたいまつを移していった。

ブロスとビロウ、騎士二人はアスワム城正門を出て、街へ下る大きな石造りの階段を降りていた。眼下に広がるアスワムの街は、大きな湖に浮く円い街と湖の先にある陸の上の街とに分かれている。アスワムの民は湖に浮く街をフロートタウンと呼び、陸の街をタウンと呼んでいた。その両方の街から火や煙が上がっているのが見てとれた。しかし、悲鳴や暴動といった民の騒ぎ声は聞こえてこない。

城から街外れまで一直線に延びるメインロードを歩いているビロウら。メインロードは商店をはじめ、鍛冶屋やパブなどが並んでいて普段は賑やかだ。一本道を入ると民家が建ち並んでいて住みやすそうだった。民たちはビロウを一目見ようとメインロードを左右に分かれて、バンナ国兵の警備のもと静かに待っていた。それはフロートタウンから先ずっと続いていた。ビロウがやって来ると民は口々にビロウの名前を呼び、叫んだ。大人だけじゃない。年齢、性別、職業など関係なかった。ビロウはその様子を見て少し安心した。

「民はみな、無事だったか」

「みな、抵抗することなく、いや、少しばかり抵抗をみせた鍛冶屋の男がいましたが、今はこのように平静を保っております」

ブロスは、アスワムの民の悲しむ表情を見ながら言った。

「ああ、鍛冶屋の男ね」

と、ビロウは笑みを浮かべた。

どうしてこれほどまでに民は、王に思いを馳せているのだろうか。恐怖政治による強制的なものではない。ビロウ王の持つドラゴンマウスによる国の導きが素晴らしいのだろう。これでバンナ国もこのようになるのだ、とブロスは心の中で改めて思っていた。

ビロウたちはフロートタウンの中心、噴水広場までやって来た。民の憩いの場として良く使われている。噴水広場を中心にメインロードと十字に交わる左右の道も民で埋め尽くされていた。ひとときわ民の叫ぶ声の重なりが大きい。そのとき、その声を止める爆発音が城から聞こえてきた。民がいつせいに城の方を心配そうに見ている。ビロウも振り向いた。城の中の何かが勢い良く燃えている。炎の大きさはここからでもわかるほどだ。一瞬の静寂は嘘だったかのように、民は落城してしまった城を見ながら泣きわめいた。ビロウはその光景を見て、噴水の手前に立ち両手を上げた。

「アスワムの民よ！ アスワムの民よ！」

ビロウが声を張り上げると、噴水近くの民から奥へと流れるように静かになり、ビロウへと視線を移して行く。

「動揺することはない。私は住む城を変えるだけだ。城は煙を上げ黒くなるが、私は民の顔をこれ以上陰らせるようなことはさせない！」

ブロスはここまで聞いて息を飲んだ。ドラゴンマウスが始まったのだ。

「案ずるな。これよりバンナ国王に私になったとしても、このアスワムはバンナ国の一部だ。一つ山を隔てたとしても私は向こうの城窓からここを見ているということを忘れないで欲しい。こ

れからの生活は決して今までと変わらない。バンナ国の民はアスワム国のような豊かな生活を望んでいる。城は焼かれてしまったが、街は破壊されていない。クーデターと見せかけるために煙は上がっているが、薪を燃やしているだけだ。事態が治ったら普通の生活に戻って欲しい。なるべく混乱は避け、私もそうならぬよう尽力する。だからバンナ国からの使いには従ってくれ。そして、バンナ国の民のためにも模範となる街作りを心がけてもらいたい。頼んだぞ！」

ビロウの言葉が止まると民はワーッと歓声を上げた。口々に分かりました、頼まれた、任せとくれという言葉が聞こえてきた。

当然、ブロスにも民の声は聞こえていた。混乱に陥った民をたった一言で自信に溢れた表情に変えさせたビロウ王の口は、まさにドラゴンマウスだ。アスワム国の先代が国を築き上げた時、民を一瞬で安心させ、納得させた。初代の王は、まるでドラゴンの叫びのように堂々と強く印象を与えたと聞く。それから王の言葉はドラゴンマウスと言われるようになった。それを俺は目のまで初めて見て聞いた。この民と同じく心から震え上がった。バンナ国の恐怖政治を終わらして正解だ。やはりビロウ王を何としてでも迎え入れて良かったとブロスは思っていた。

そこに民の中から杖をついた老人が割って出て来た。ビロウに近づくと、

「国王様よ」

老人はゆったりとした口調でビロウに話しかけた。

「長老。どうされた？」

「私が生きとるうちに、よもや国王様がいなくなるとは思ってもいなかった。空向こうの先代もさぞかし驚いていることだろうよ。長生きなんてするもんじゃないの」

「長老。何をおっしゃっているんですか。まだまだお孫さんたちをかまってるんでいい」

と、ビロウは長老を茶化した。長老は少し黙った。そして、

「……国王様。体に気をつけてな」

「分かりました。長老も……。ブロス。この方は街の相談役だ。今後何かあったら話を聞くと良い」

ブロスは長老と握手を交わそうと手を差し出したが、長老は少し躊躇していた。でも、長老はブロスの手を握った。ぐっと手を握られたブロスは、少し痛みを感じた。長老の握力が想像以上に強かったのだ。

この御年でこれほどの握力とは……。ブロスは苦笑いするしかなかった。

「バンナ国騎士団長、ブロス＝レステシュートです。何かとお世話になるとは思いますが、よろしくをお願いします」

「ああ、若いのが、よろしくな。だが、人様の幸せがお主らの幸せになるのかどうか分からんぞ。その幸せに浮かれるんじゃないぞ。老人からの忠告じゃ」

「！ 肝に銘じておきます」

ブロスは、深い意味まで理解できなかったが、そう答えておいた。

長老はコクッと頷いて民の中へと戻って行った。ブロスは握られた手を気にしながらビロウに小声で話しかけた。

「あのご老人、外見からは想像し難いほどの握力でした。何かやられている方なのですか？」

「ここから南に下った所にある海岸の街で飛空艇を造っていた人だ。今は杖をついてはいるが、昔は相当の腕前だった」

「そうですか。アスワムには素晴らしい人が存在しているんですね」

「それはバナナ国でも同じことだ。人は人なのだ。もうアスワムの民は落ち着いた。先を急ごうか……」

「ハッ！」

そう言ってブ羅斯は、ビロウの先を歩き始めた。民は冷静にビロウを見送った。フオートタウンを抜け、タウンも何事もなく民に見送られて行った。

街外れにバナナ国の馬車を用意されていた。それにビロウらが乗り込もうとしたとき、闇夜の空にグォーングォーンという動力音が響き渡り始めた。

「何の音だ？」

ブロスが周囲を見回すと、一人のバナナ兵が空を指差した。

「あれです！」

木造の飛空艇が一艇—高度はわりと高い所—飛んでいた。

「エルフの国の飛空艇だ。もう嗅ぎ付けてきたのか……」

ビロウが答えた。肉眼では艇についた旗は見るできない。

「どういうことです？ なぜ、お分かりに？」

ブロスがたずねた。

「十年くらい前に修理にやっていたことがあった。飛べたもんじゃないくらいボロボロになって。もともとアスワムで製造していた艇をエルフ族が買って行った物だ。海向こうの大陸ではちょうど種族間で戦争が行われ、最終的にエルフ族は地を追い出されたと聞いた」

飛空艇はアスワム城を遠巻きに一周し、街の上空でしばらく止まっていたが、何もすることなく離れて行ってしまった。

長きに渡ってバナナ国王の絶対防御魔法により鎖国に近い状態が続いていたことで外の情報は入りにくかった。特に海向こうのことは。これからは外へも目を向けなければならないとブロスは思った。

「高みの見物か……。どこかでこの混乱を嗅ぎ付け、あわよくば混乱に乗じてこの土地を乗っ取るつもりだったのだろう」

ビロウは飛空艇が消えた空を見つめながら言った。

「自分たちの入る余地がないと思ったのでしょうか……」

「どうだろうな。バナナ国は革命を起こし、アスワムがバナナ国に落とされた。勢いのある所に戦いを挑むほど頭が悪い訳ではなかろう。ただ、絶対防御魔法が消えたバナナ国は何か形を変えて国を守らなければならない」

「さすがビロウ王。すでにバナナ国の弱点を見極めておられるとは……」

ブロスは無性に嬉しくなった。ビロウ王がものの数時間で隣国であったバナナ国の現状を理解し、すぐに次のことを考えているそのことに。偉大なる先導者を本当に獲得したと実感できた。

「民を幸せに国を反映させる。改革という攻めの姿勢も必要だが、それを実行できる力が必要なのだ。その力は我々ではない。民、そのものだ」

「……」

「一血計画を実行して、ブロス、君も分かったはずだ。民というものを」

「……そうですね。皆の協力があってこそだったと思います」

ブロスが一血計画を実行するまでを頭の中で振り返ると、素直にそう答えることができた。ビ

ロウはブロスの表情を見て、微笑みを返した。

「夜が明けたら忙しくなるぞ」

ビロウは、兵がドアを開けて待つ馬車に乗り込んだ。

ビロウらに乗せた馬車は、月明かりを頼りに森の中を走って行く。一晩中走り続けて明朝にバナナ城に到着できるかどうかというくらいの距離だ。アスワム国とバナナ国の間には、二国を分かつ基準となっているウィナウという山脈がある。大陸を縦に二分するほど大きい山脈で、ウィナウ山脈に限らず古より山は何人のものではない神聖なる領域とされている。決して争いの場にしてはならない。もし山の中で血が流れるものなら、災いが起こるとされている絶対領域なのだ。

ウィナウ山脈をいかに抜けるかでバナナ国への到着が左右される。幸いダーナ峠という峠が太古からアスワムとバナナをつなぐ峠として使われ、かなり整備されている。だが、千五百メートルもの標高があるので上がって下るのも一苦勞だ。峠の入り口には関所があり、神聖なるウィナウ山脈に祈りをささげて通行の許可がおりる。それは国や種族関係なくこの大地に生きる者の心なのである。

アスワム国からダーナ峠の頂上を超える頃はまだ陽の出より少し前。車を引く馬の休憩をしばしとった。アスワム国とバナナ国のあるこの大陸の気候は平均して暖かいが朝晩は少し冷え込む。標高が高いせいもあって馬の息も白くなっている。

ダーナ峠からは、アスワム国とバナナ国を一望できるがまだ陽が昇っておらず緑深い森が広がっているようにしか見ることができない。バナナ国側だけは……。アスワム国側というと、今日この日に限りアスワム城の位置がはっきりと分かる。空をも赤く照らすほど城がいまだに燃えていた。ビロウは肌寒さを忘れてしばらくの間アスワムの城を眺めていた。そして、ブ羅斯は何を思う新しいバナナ国王の背中を見つめていた。

ビロウ王、私たちはまだあなたの一部しか知らない。あなたはまだ私たちの一部しか知らない。これから分かるバナナの良い所とアスワムの良い所を合わせてこの大陸に唯一無二の人型理想形態国（ユートピア）を創造してもらいたい。と、いう思いとともにブ羅斯は拳を握りしめた。

バナナ城に到着したのは、朝をだいぶ過ぎた頃だった。混乱を避けるため、バナナ城前に広がるバナナの街の外を回って城へ入ろうとしたが、城にバナナの民が大勢、新国王ビロウを一目見ようと押し寄せていていた。馬車の中からその光景を目の当たりにして、ブ羅斯は驚いていた。まるで昨夜のアスワムの民を見ているようだった。アスワムとバナナの民の表情に違いはあれど、ビロウ王が迎えられていることは確かだとブ羅斯は思えた。

ゆっくり城へ向かう馬車に手を振る民に、ビロウは控えめに手を振り返した。馬車の中にも民の歓声は聞こえてくるほどだ。突然、馬車の前に飛び出て来る若者たちもいたが、ビロウを乗せた馬車が無事に城の中に入ることができた。しばらくの間、城周囲は嚴重に警戒しなければならないだろう。ブ羅斯は兵に念を押して伝えた。今すぐにでも新国王の挨拶を民にしておきたいところではあるが、それより先にやることがある。

ブ罗斯は城の地下へビロウを案内した。たいまつが灯り空気が少しひんやりとしている。ある大きな鉄扉の両側に兵が二人立っていた。ブロスが手で合図を送ると一人の兵が扉に鍵を差し、扉を開けた。

「どうぞ」

と、言われ、ブロスとビロウは部屋の中に入った。少し広々としているが、窓も装飾も一切ない部屋の中央に広い石台があった。底には石台からはみ出るほどの大きな人物が寝かされていた。よく見ると牛蛙のような巨体の胸に剣が突き刺さっている。剣の刃全てが体に刺さっていて柄の部分しか見ることができない。石台を伝って床にまで血が流れていた。

ビロウはその血を避けるようにして、全バナナ王の顔を確認した。今でも苦しんでいる表情に見てとれた。

「これが約三百年生きた人間の最後か……。絶対防御を持つと言われていたが、まさか剣でひと突きだったとは……。これはブロスが？」

「いいえ、私ではございません。剣を刺したのは、アンヘン＝克蘭ダムと言う者です」

「絶対防御魔法をも突き破る剣技か……」

ビロウは一人感心していた。そこに走って部屋に入って来たブロスと同じ黄色いマントをまとい、腰に剣を備えた男が入って来た。

「ブロス、無事に帰って来たか！」

その男の声はとても明るく勢いが良かった。

「トゥルー！ ビロウ王の御前だぞ！」

ブ罗斯は怖い顔をして言った。金色で長髪、ブロスよりひと回りも大きくガッチリとした体格のトゥルーは、ピシッと姿勢を正し、頭を下げた。

「失礼しました、ビロウ王。彼は第参騎士団長のトゥルー＝オアフォルス。少々、筋肉馬鹿な所がありまして……」

ブロスの最後の説明はやや小声だった。

「顔を上げよ、トゥルー。ふむ、立派な騎士団の長の風格。とても頼もしいぞ！」

「ありがたきお言葉！」

トゥルーの声は部屋の外にも響き渡るほどだった。そして、ブロスに耳打ちした。

「それは本当なのか？ なぜ……」

ブロスの問いにトゥルーは何も返せなかった。

「どうかしたのか？」

困った顔を見せているブロスにビロウが問うた。

「実は、アンヘン＝克蘭ダムが失踪したらしく姿が見当たらないそうです」

「王を殺害して、罪を意識したのでしょうか？」

トゥルーが思ったことを言った。

「アンヘンというその男は、騎士の一人ではないのか？ ここまでのことをすれば英雄と称され

でもおかしくないぞ」

「はい。確かに暗殺が成功すればその称号を与えるつもりでいました。ただ、奴はもともと囚人だったので……」

「暗殺の道具に利用され囚人であるが故に、実際には英雄の称号はもらえず自分が殺されてしまうかもしれないと危惧したと」

「その可能性も考えられますが、奴にはもう一つ特異な所があるんです。誰かがそれを狙った可能性が……」

「特異？」

ブロスの顔が深刻な表情に変わった。

「はい。アンヘン＝克蘭ダムは魔法効果を無効化することができる人間なのです。魔法効果を解き放つ解呪魔法を唱えることができます」

ブロスの言葉を聞いたビロウは、瞬時に前バナナ国王に突き刺さった剣を見た。

「絶対防御魔法を解き放ち、剣を刺したのか……」

「はい。前国王はアンヘンを恐れ、長年拘束していました。しかし、その監視をしていたのは我々だったので計画には問題なく……」

「ならば、すぐにアンヘンを見つけねば、安否も気になるが、良からぬ者が彼と手を組めば、バナナ国の脅威になりかねない。海を渡ってしまえばどんな影響が出るか分からなくなる。追跡チームをただちに編成し、私から英雄の称号を与える書文を持たせよ」

ビロウは、明瞭にブロスに伝えた。

「トゥルー。新制バナナ国の最初の任務だ。追跡メンバーを選出し、すぐに走らせろ。他の騎士団、魔導士団、城の主要従者たちを王の間に集めろ。また、街へ一部の魔導士たちを配置し、新国王の声を民に届けろ。急げ！」

王の間。

舞踏会が開けるほど広く、天井、窓枠、絨毯、王の椅子など至る所まで装飾が施され豪華絢爛である。王を前にその場を埋め尽くす騎士団、魔導士団、城の従者たち。ビロウが気になるのかざわざわしている。

ビロウの頭上に青く光る球が浮遊し、その球の中では緑色の閃光が自由に走り回っていた。青いローブを着た二人の魔導士がそれに手をかざして作り出していた。これはビロウの言葉を遠くに届ける魔法の一つ。緑色の閃光がビロウの言葉を拾い、瞬時に街へと飛び出して行く。街では指定された場所で魔導士が同じように青い球を作り出して待機している。次々と飛んで来る緑色の閃光が球の中に入ると、持ち運ばれて来た言葉が青い球から聞こえてくるのだ。

民は魔導士を中心に集まっている。お告げを待っているかのように胸の前で両の手を組み合わせている。

ブロスが場を静め、ビロウの言葉を聞くように言った。またドラゴンマウスを見ることができると胸が高鳴っていたブロス。無論、ブロスだけではなくその場一同が、民が、そうであった。そして、ビロウは一步前に出て、両手を上げた。ビロウが話し出すと同時に、緑色の閃光が次々と絶え間なくあらゆる方向へ飛び出て行く。

「今ここに私が立ったことで、新制バナナ国が始まった。民は変革を願い、その願いを背負って実行した目の前にいるバナナの中心たちよ。民の信頼はとても高く、その眼差しは強い。その期待はまだまだ続く。それこそ国が終わるまで。いや、終わらせてはなるまい。国を守ることは民を守ることだ。民より向けられた期待に正面から答えるべきだ。それがどんなに重いモノであろうと、みなで支え合おう。もう言うまでもないが、当然私もその中にいる。みなに望まれるべくして私がここに立っているのも、みなに望まれるべくして行動を起こしたからだ。何も心配することはない。共に悩み、共に分かち、共にバナナの国を、バナナの民を守って行こう！ そして、良い国にしようではないか！」

ビロウは言い終わると両手を下げた。バナナの国全体で一瞬の静寂の後、拍手と歓喜の声に包まれた。一同の心は、ビロウの言葉に握り潰されるかのように驚掴みにされ、ビロウにみな惹かれた。

その日の夜は、新制バナナ国とピロウを祝って街中でお祭り騒ぎになった。バナナ城内でも特定の階級以上のものが集められ、宴が開かれていた。豪華な料理がテーブルに並び、立食形式で次々とピロウは挨拶を求められていた。一通り各個人との挨拶を終え、ようやく落ち着くことができた。一部の騎士たちはかなり酔って騒がしかった。

ピロウはふと壁に目をやると、大きな額にはめられた絵が掛けられていた。近づいてみると、それはバナナ城を中心にバナナ国領土が描かれた地図だった。城の下には街があり、城と街の脇を川が流れ、そのまま川に沿って下へ行くと大きな湖がある。その湖のすぐ東側には青く描かれた山、ゴドリフ魔鉱山と名前も書かれていた。絵の左側はアスワム方面であるがウィナウ山脈までが描かれているだけだった。その反対東側には海がある。

そして、ピロウは絵の脇に置かれた花瓶にささる七色の花が気になった。その花はバラやチューリップの形に似ていたがそれらとは違う物だ。よく見ると花びらは七枚しかなかった。花びら七枚とも色が違う花もあれば、一枚の花びらが七色のものもある。しばらく見ていると、その七色が花びらの中を移動し始めた。

「これはすごい！」

ピロウは、思わずに口に出した。

「その花が気になりますかな、国王様」

唖れた声の主の方を向くと、山吹色のつばがかなり広い三角帽子をかぶり、顔はそのせいで暗くて良く見えず、青いローブを着た魔導士がいた。このような人物とはまだ挨拶をかわしてはいなかった。顔をピロウに向けたつもりか、三角帽子のつばがわずかに上がった。すると目だろうか、二つの黄色に輝く物がピロウを見ていた。と、そこに慌ててブロスが駆け寄って来た。

「国王様！ ご紹介が遅くなりましたが、魔導士団長のググ様でございます。バナナ国では珍しく魔導士の源流国ミシディアンタ出身の方でございます」

「おお、これはこれは。ミシディアンタ出身の方と初めてお会いできて、大変嬉しく思います」

ピロウは笑顔で軽く会釈した。

「国王よ。この花が気になっておったな」

「ええ。花の色が変わるとは……。このようなものは初めて見ましたから」

「そうじゃろ。この国、独自の魔法工学によって生物や物と魔法を共存させることに成功したのじゃ」

「ほお。それはじつに興味深い。この花にはどのような効果が？」

ピロウは聞いた。

「心の癒しだ。花が発する魔法の効果は微力なものだが、もともと前国王の願いで作った物なのだよ」

「願い？」

「七色の意味じゃよ。存じてはいるだろうが、この世界にはドラゴンレイクと呼ばれる湖が七つある。バナナ国にもここから南に下ったところにある湖もその一つ。アスワムにもあるじゃろ。

昔、ドラゴンが食べるとされていた実のなる巨木が湖の場所にあったそうだ」

「その巨木の痕が湖になったと聞いたことがあります」

「その実のなる巨木は、実は世界に四本しかなかったとされていてな。残りの三つの湖は何らかの原因でできたそうだが……。天災という話もあるがな。それでも昔からドラゴンレイクと呼んでいる。それで前国王は、七つの湖をこれ以上増やしてはならぬという願いを込めてこの花を作ったのだ。気休め程度の効果だけだかの。リミテッド・セブンと皆は呼んでいる」

「それで七色。リミテッド・セブンか」

ビロウはじっくり花を観察した。するとブロスが笑顔で、

「初めて昔のことを聞きました。ぜひ、皆にもその話をしてもらえませんか？」

「ブロス、どういう意味だ？」

ビロウはブロスの発言に違和感を覚えた。するとググが不気味に笑い出して、

「フフフ……。国王様、当然ですぞ。ブロスのような若い連中だけでなく、今生きているバナナの民は『歴史』というものを知らないのじゃ。『歴史』という言葉の意味すら理解できないじやろ。前国王の鎖国的政治により知ることができるのは、生きている間のことのみなのじゃよ。これからは多くの種族に出会い、世界を知って行って欲しい」

ビロウはググの言葉を聞いているうちは呆気にとられていたが、しばらく腕を組んで考え込んだ。

「ではそう言ったことの教育の場が必要となってきますね」

「そうだとおも……。フフフ……」

この宴は深夜まで続いた。だが、ビロウの頭の中は国の方向性を考えることでいっぱいであった。騎士や魔導士がいて、アスワムにはない魔法工学というもの。ビロウはもっとバナナのことを知りたくなっていた。

アスワム国のような国作りを望んでいるバナナ国とはいえ、そっくりそのままアスワム国の制度や風土を持ち込んで実行したところで上手くいくはずがない。長い期間、閉ざされ習慣になっていることもある。ピロウは城内での話し合いもそこそこにして街の中を自分の足で歩き、民と積極的に話をした。老若男女、笑顔で楽しく会話をすることができた。最初は民に戸惑いもあったが、ピロウが話を進めて行くことでいろいろな話をしてくれた。

それらのやり取りの中で見えてきたことは、アスワムのような自由を求めたバナナ国が自由になっていないことだ。いや、自由の入り口に立っているが、歩き方を知らないと言った方がよい。すぐに教育機関が必要だなとピロウは考えた。

今まで民が生活をしてきた中で獲得、開発してきた職や技術はある。それを誰もが選び学ぶことができ、歴史や世界についても知ることができる機関を作ろうと政策を打ち出した。そうすることで各個人が判断、決断などできるようになると考えた。

また、こうして開かれたバナナ国を守っていくには武力も少なからず必要だが、経済にも対応していってもらわなければならない。そこでピロウが着目したのが、あの魔法工学だ。植物や物に魔力を持たせて効果を発揮させるものが経済発展の鍵になりそうだ。当然、アスワムにはなかったもの。おそらく世界でも物珍しい産物になる。魔力を永久に持続させることはまだ難しいようだが、バナナの湖の東側にある青い山とも呼ばれるゴドリフ魔鉱山で採掘された魔力を宿したままの鉱石を使えば、ある程度長く効力を持続させることができる。製品によっては鉱石の取り替えだけで済むのであれば、同じ製品を繰り返し使え、効果の違う鉱石を一緒にしておくことで素晴らしい魔法工学製品が生まれる気がした。そう思えたのは、ある家具職人と魔導士が作った椅子を街で見せてもらった時だ。その椅子は木でできていて、座面や背もたれ、肘掛け部分に穴が空いていて、そこに魔力を込めた鉱石をはめ込む。例えば、腰の療養の椅子になるという。全バナナ国王の命令で開発を進めていたようだ。つまり、魔力を閉じ込めた鉱石と既存の製品を組み合わせることで新しい製品を生み出すことができる。また、魔法が使えない人でも、鉱石を使うことでその魔法効果を発揮させることもできるだろう。

そして、これは武力にも応用できると踏んでいる。絶対防御を失ったバナナ国を守る強い力となり得る。戦闘時、魔導士単独では防御力が弱いですが、鉱石を混ぜた防具を身につけていればよりよい状態で戦えるだろう。また騎士にとっては、剣に鉱石を仕込むことで物理攻撃に加えて、鉱石による性質攻撃も可能になる。それに負傷した身体も回復させることができれば、有利な戦況を展開できるだろう。

魔法工学の開発、発展がバナナ国の将来を左右する。アスワムの技術も一緒に取り入れることによって世界への影響力も大きいはずだ。

別の時。ウィナウ山脈の中で一番高いラダック山のふもとーバナナ国側のダーナ峠より北上した一で追跡チーム四名がアンヘンを見つけた。

モンスターの棲になっていそうな洞窟の脇で、木々の間から差し込む陽を浴びながらアンヘンは眠っていた。追跡チームの馬の足音に気づき目を開けた。

「こんなところで昼寝か。アンヘン＝克蘭ダム」

飾りのないシンプルな面をつけた四人。その先頭のリーダーが聞いた。アンヘンは黒くて短い髪、細目で笑うための筋肉がないかのような冷たい表情の男だった。

「何用だ」

アンヘンがそう言うと、リーダーは懐から出したビロウ直筆の書状を広げて見せた。

「革命の成功に貢献したことを称え、英雄の称号を与えると新バナナ国王からの書状だ。願わくば一緒にバナナ城へ戻ってもらいたい」

「拒否する」

「なぜだ」

「自由の身だ。国に関わるつもりはない」

「バナナでの生活は保障されている。拒む理由はないはずだ」

と、その瞬間、書状が真っ二つに切られた。リーダーのすぐ脇にアンヘンが立っていた。彼の手元を見ると、ダガーなる刃物が握られていた。

「貴様、何をしたのかわかっているのか。また檻の中に戻りたいのか？」

「……」

――。

――。

――。

しばらくの静けさの後。

「グァーッ！」

アンヘンがリーダーの背中を持っていたダガーでひと突き。それは胸まで達していた。リーダーはその場に倒れた。アンヘンが他の三人と退治すると、アンヘンの目はさらに細くなっていた。

すぐに三人は剣を抜き、馬を走らせアンヘンに向かって突き進む。しかし、一人目、二人目と順に流れるように落馬し、ぴくりとも動かなくなった。

残るは一人。手綱を持つ手が震えていた。反対の手に持つ剣先もすでに下を向いている。アンヘンはダガーを差し向けた。

「女か……。命が欲しければ去れ。そして、新国王に伝えろ。もう二度と貴様の面など拝みたくないとな……」

「……」

女はすぐに背を向け馬を走らせた。面の後ろから伸びた長い髪をなびかせて。

その日の夜には、ビロウに報告が上がっていた。アンヘンの身のこなし、解呪魔法の会得、特殊な訓練を受けたアサシンだと断定し、要注意危険人物に指定された。念のためバナナ国は警備を強化していくことになった。

ビロウ王が新バナナ国王になってから約三ヶ月が経った頃、バナナの民の間で変な噂が流れていた。

三ヶ月前のアスワム城落城の際、ビロウ王が逃がした王妃とその娘、使用人が未だに見つかっていなかった。焼け残った城で、崩れた逃走路を掘り返しても途中で道は埋まり分からなかった。ビロウに質問しても分からないとしか答えを返さない。ある時から彼女らは死んでしまっているという噂が流れ始めた。夜になると焼け残った城の一部で白く光り動く物を見るという。バナナにもその話が伝わってきていたのだ。

彼女らの搜索を打ち切ってからはアスワム城は立ち入り禁止となり誰も近づいていなかった。

バナナ城内の広場では、ブロスによる騎士の育成が行われていた。前バナナ王を倒したバナナ国騎士団は民の間でも話題となっていた。ビロウ王による新政策によって職業が自由に選べることになり、騎士団が若い男たちの憧れとなっていた。武力増強もはかるため、新人の育成を盛んに行っている。

ビロウは、お付きの騎士と城内を歩いていると窓の外のブロスを見かけ足を止めた。ビロウはしばし、ブロスの訓練の様子を見ていた。

この時は、ブロス自ら剣を握り、訓練兵と剣を交えていた。どんなに勢い良く剣を振りかかってこられようとブロスは、微動だにせず冷静に振り下ろされる剣を無駄な動きのない剣技で打ち返す。たとえそれが三人になろうとも変わらなかった。

「これは見事。さすがだな、ブロス。第壹騎士団長を務めるだけはあるな」

ビロウは、訓練兵に真剣に剣技を教えるブロスに感心していた。

「国王様。そろそろ行きましょう。ググ様がお待ちになっているはずです」

外を眺めるビロウに、お付きの騎士が言った。

「お、そうだな。行こうか」

魔導士ググの待つ部屋にピロウが入ると、ググとまだ小さな女の子三人がいた。

「国王様、わざわざここまで足を運んでいただきありがとうございます」

ググは三角帽子を被った頭を下げた。

「ググ。私に会わせたいと言っていた者たちは、この子らか？」

「はい。魔導士学校に通っていて、魔導の力を体に強く宿すまだ十歳の子供らじゃ。幼い故に魔法のコントロールは不安定じゃが、他の誰よりも魔道の力を帯びている」

「この子たちが……」

「どれ、少し見せてみようか。まずは、カオルナ」

ググが髪の高い女の子の名前を上げた。

「ハイ！ カオルナ＝フラッシュカードです！」

とてもハキハキとしていて明るく活発そうな女の子に見てとれた。カオルナは両手を前に出すと、空中にポワッと炎を出してみせた。

「おお！」

ピロウは、発火の瞬間に少し驚いた。

「これだけじゃないよ！ ヨッと！」

カオルナは左手をそのままにして右手を左手の上で回転させると、炎が渦を巻いて小さな竜巻になった。そして、右手を縦に振り下ろすと、その炎の竜巻から稲妻が発生し始めた。

「どうじゃ。彼女は自然を利用した魔法を同時に扱うことができる。普通は一つの魔法を出していると他の魔法は使うことはできないのだが、彼女にはできるのじゃ。それに重力を操ることができる」

ググがそう言うと、

「見てて！」

カオルナは部屋の隅にある花瓶を離れた所から触れずに浮かせてみせた。

「なんと！」

「カオルナ、ありがとう！」

「たやすいもんよ！ へへへっ！」

カオルナは自信たっぷりに言ってみせた。

「ちょっと口の聞き方に難ありってところじゃがな。次はシホン。君だ」

「ハイ……」

小さな声で可愛らしく答えたくせ毛混じりの女の子。

「シホン＝アフタフェクターです。よろしくお願いします」

ピロウにゆっくり一礼した。カオルナとは性格が正反対だなとピロウは思った。

シホンは袖をまくり、ポケットからナイフを取り出し、自分の腕を斬りつけた。きれいな白い肌に線が入り血が溢れ出す。

「えっ！」

ビロウはシホンの行動に驚き、目を見開いた。しかし、ググは何も言わず様子を見ている。

シホンは痛みにも何も反応することなく、傷口に手をかざし詠唱し始めた。すると傷口に光りが集まり出し、裂かれた皮膚がみるみると閉じていく。そして、何事もなかった元のきれいな腕に戻った。

「回復魔法ですか？」

「人体回復だけではないぞ。アオイミ、さっきカオルナが持ち上げた花瓶を落としてみなさい」

「は～い！」

最後の一人、髪の高い女の子アオイミ＝ウェーバーが少し面倒くさそうな感じで言うと、その場から動かず、花瓶のある方向に手をかざして、スッと手を横に引いた。その瞬間、花瓶はその場から消え、シホンの前にパッと出現した。そして、花瓶はそのまま落下し割れた。

「まさか！」

「そっ！ 私の力は物を空間移動させることができます。物だけじゃなく、人だってできますよ。自分も移動できるけど、まだ魔力が足りないからあまり遠くまでは行けないで～す」

アオイミが頼んでもいないのにマイペースに自分の力を語った。

「アオイミは、空間移動だけではなく空間把握、空間察知にも長けていて、魔力が高くなればこの城も目をつぶって走り回ることができるじゃろ」

ググはアオイミの説明を付け加えた。

「はあ……」

ビロウは実際に目の前で見て何も言うことはできなかった。

「最後にシホン。壊れた花瓶をもとに戻してごらん」

「……はい」

またシホンは控え目に返事をして、手をかざすと、バラバラになった花瓶は光りに包まれていき、その中だけ時間が戻るかのように破片がくっついていく。あっという間にもとの花瓶に戻ってしまった。

「シホンは人体だけじゃなく物自体も元に戻すことができる。可能性としては、時間操作や、もしかすると解呪魔法を会得できるかもしれん」

ググの囁れた声はいつもより弾んで聞こえてきた。

「なんとも個性的な魔導士になることでしょう」

ビロウはググに笑顔を見せた。

「国王様。それでお願いがあるのじゃ。三年後、この子たちが十三歳になる年に我が故郷ミシディアンタに連れて行き、魔導士源流の地で修行させたいのじゃが、行かせてもらえるかな？」

「そうですね。ググ様がそこまでこの子たちに期待をしているのであれば。君たち皆は親元から離れても大丈夫なのかな？」

ビロウは三人に聞いた。

「別に！ なんかすごい所に行けるから私は大丈夫だぜ！」

真っ先に答えたのは、カオルナだった。次に答えたのは、

「なんか、そっちの方がここより面白そうだしいいと思うけど。でも、三年後にそう思っている

かどうか分からないけどね～」

アオイミがあまり興味なさそうに答えた。シホンはもじもじとして自分から答える感じはしなかった。

「君はどうかかな？」

ビロウが聞いた。

「……えっと、私はググ様が行こうと仰っていますので、私は着いて行こうと思います」

シホンがそう答えると、ビロウが

「三年後の彼女らの意思次第かもしれませんね……」

「フッフ……。三年後が楽しみじゃ」

「しかし、三年後でよろしくて？」

ビロウはググに訪ねた。

「もう少し魔導の力を引き上げてからの方がミシディアンタでの修行がスムーズになる」

「わかりました。この子たちにも頑張ってもらいましょう」

「ありがとうございます。国王様！」

ググは深々頭を下げた。

ビロウは、あらゆる書類に目を通す作業をしている時だった。ブロスが少し長い物を布にくるんだ状態で持ってきた。

「これは？」

ビロウは聞いた。ブロスは何も言わずに布をめくった。ビロウはそれを見て、目を見開いた。

「こっ、これをどこで……」

それは白い杖だった。持ち手の部分にドラゴンの顔が装飾され、木や鉄ではない何かで作られたものだった。

「アスワム城の王の間の隅にあったそうです。アスワムに駐留している第弐騎士団から預かりました。なんでもここ数週間、夜の城で白く光るものを見かけると言われていて、原因を調査していたところ、これを見つけたと」

「そうか……。アスワム、ドラゴン家が伝承していく杖なのだ。これは……」

「ぜひ、国王様の手元に置いて下さい」

ブロスは笑顔で言った。しかし、燃えた城の中は真っ黒だったにもかかわらず、数日前に発見されたこの杖だけは真っ白だ。なぜ、これは燃えることなく残ったのか。いったいそれは何でできているのかブロスは気になってはいた。

その夜、ブ罗斯は仕事を終え、数日ぶりに街外れにある自宅に帰ることができた。ローテーションで城内の泊まり込みと自宅の帰宅が決まっている。自宅のドアを開けると、

「おかえりなさい、ブ罗斯！」

ブ罗斯の妻エルジェの明るい声とともに決して広くはないが部屋いっぱい広がった夕食の匂いにブ罗斯は包まれた。些細なことではあるが何日かぶりの帰宅に幸せを感じていた。

「すぐ夕食にするわね！」

「ああ」

出迎えてくれたエルジェは台所へ戻って行った。歩くその後ろ姿いつもよりゆっくりのような気がした。ブ罗斯は気のせいだろうと特に何も考えることはしなかった。いつもここにいてくれてありがとうと思う気持ちの方が強かった。

しばらくしてテーブルに庶民的なものばかりではあるが、ブ罗斯の体調を気遣った栄養のあるものや肉類の料理が並んだ。

「さあ、食べよう。いただきます！」

「いただきます……」

ブ罗斯はガツガツと食べ始めた。しかし、エルジェは食べることはせず、少しうつむいていた。

「エルジェ。どうしたの？ 食べないのか。冷めちゃうよ」

ブ罗斯は笑顔で言った。それでもエルジェの表情は変わらなかった。いったいどうしたのだろうか。何か気に障るようなことをしただろうか。新国の体制を整えるためにここ三ヶ月は忙しかったが今まで一度たりともエルジェはそんな素振りを見せたことはなかった。なのに今になって……。

エルジェが徐に顔を上げてブ罗斯を見つめた。その表情はより険しくなっている。

急にブ罗斯の胸の鼓動が早まり始めた。いったいエルジェは俺に何と言うのか……。

「ブ罗斯……。私たち……」

「——」

ブ罗斯は息を飲む。

「私たち……私たち……私たちの子供を授かりました！」

あの険しかったエルジェの表情が、突風が吹いたかのように一瞬で満面の笑みに変わった。ブ罗斯は呆気にとられて何も考えられていなかった。

「ブ罗斯。しっかりして！ 赤ちゃんができたのよ。お父さんになるのよ！」

エルジェははしゃぐように言った。

「——。ほっ、本当なのか？」

ようやくブ罗斯は理解することができた。

「本当よ」

「本当なのか？」

「本当よ」

「本当なのか？」

「本当よ。もう何回言わせるの？」

「ほっ……。そうかぁ……」

「ふふっ。全然分からないと思うけど、お腹触ってみる？」

「ああ」

ブ羅斯は、触れてはいけないものに触れるように、胸を高鳴らせながら、エルジェのお腹を触った。

「ここに俺たちの……」

「ええ」

「この子が生まれてくる頃までにはもう少し広い家に住もう」

「ええ、そうしましょう」

王の寢室。ビロウは、月の光りが入り込む窓辺に白い杖を持ち、月を見ながら立っていた。ビロウが見ている闇夜を照らすその月は半月だった。

「たとえ、炎に包まれようとも残るこの杖が、よもやこんなに早く私の手に戻ってくるとは……」

ビロウは、ドラゴンの顔が装飾された杖の持ち手をひねると、持ち手の部分が外れた。杖の中は空洞になっていて、持ち手の接合部分には先が尖った針のようなものが突き出ている。ビロウは何のためらいもなく指先にその針を刺す。プチッと空いた皮膚からじわりと赤い鮮血が湧き出てくると、親指で絞り出すようにさらに血を出した。そして、指から垂れ落ちそうになった血を杖の空洞に流し込んだ。

「ドラゴンの骨で作られたこの杖を私の血で満たすにはどのくらいの時間がかかるだろうか……」

ビロウは杖の持ち手をもとあったように差し直した。

この日の夜を境に王の寢室からは、歌が毎晩聞こえてくるようになった。

月闇の歌

半月の夜 ざわつく空気
月の光りに照らされた果実が
欲しくて現れるあなた
私の黒い存在

鉄の肌 刀の爪
支配に満ちた幸せの魔法で
月闇に現れるあなた
私の黒い存在

心の穴を 満たす涙
命が尽き果てようとも残る
私の生きた証

三年後。

バナナの街は変わった。何より街全体に活気が生まれ、民は自由に生活を送っていた。いろいろな学校ができて、学ぶ者がいれば、教える者がいる。メインストリートには数多くのお店が建ち並ぶ。食事処、パブ、服屋、武器屋、鍛冶屋、飛空艇屋、魔鉱石（マージン）屋、宿屋など三年前には想像できないほど発展した。人の数が増えたことにより街の面積も二倍に広がった。

そして、国を出て行く者もいた。自分の力を強めるため、世界を知るため、運命に導かれて……。

朝を少し過ぎた頃、十三歳になった少女たち三人がまさに旅立とうとしている。街の南にあるバナナの湖に多くの民が集まっていた。三人の門出を一目見ようと駆けつけていた。湖畔近くに一艇の飛空艇が止まっていた。民はみな、手を振っている。

その飛空艇の甲板に少し大人に成長した少女カオルナ、シホン、アオイミが同じように笑顔で見送りに来た民に手を振っていた。

「それじゃーな、いってくるよー。すごい魔導士になって帰ってくるからなー！」

他の誰よりも大きな声のカオルナ。そこに山吹色の三角帽子を被ったググがやって来た。

「三人とも。もう出発するぞ。しっかり手を振っておくのじゃぞ」

「わかってるって！」

「はい！」

「は～いはい！」

カオルナ、シホン、アオイミはそれぞれ返事をするともう一度大きく手を振った。

グオーングオーンと飛空艇の動力音が聞こえてくると艇が水面から離れ、宙に浮かび始めた。すると民の歓声がより大きくなった。自分の息子を抱きかかえたブロスも負けじと、

「立派になって帰って来いよ！ ググ様、三人をどうかよろしくお願いします。そして、今までありがとうございました」

と、言ってみたが民の歓声に飲まれて聞こえてはいないだろう。ブロスはそうなると思っただけ、叫んでおきたかった。

みるみると飛空艇は高度を上げて行き、飛び去ってしまった。民は飛空艇がどんなに小さくなくても見えなくなるまでその場にいた。

「行っちゃったわね」

ブロスの隣に並んでいたエルジェがつぶやいた。

「ああ。この子もこの国で大きく成長すれば、いずれあの子らのように立派になるさ。それにバナナ国もまだまだ成長して行くよ。国王様のもと、一緒に……」

抱きかかえた息子をあやしなながらブロスはそう口にした。

「そうね」

その日の陽が沈んだ頃。アスワムの街—フロートタウン、街全体にたいまつなどの明かりが灯った。バナナ国領となったアスワムはバナナの騎士による監視下に置かれているが、生活はあまり変わってはいない。魔法工学などのバナナの新しい技術は流入して来てはいたが、バナナの民がアスワムにやって来ることはここ最近ほとんどなくなっていた。逆にアスワムの民が、ビロウの許可なくバナナへ行くことは禁じられている。アスワムの民はみな、ビロウが宣言していたように以前と同じようにアスワムでの生活を送っていた。

突如として、フロートタウンに黒装束に身を包み、頭も深々とフードを被る謎の人物が現れた。空を見上げると半月の月が見える。まだ陽が沈みきっていないのか、何が原因なのかはわからないが、その月は異様に赤く見えていた。そして、謎の人物は脇目もふらず、真っすぐフロートタウンの中心へと向かった。通りを歩いている民は、異様に目立つ黒装束の人物に気づいていない。それとも気づかないフリをしているだけなのか。

誰かに声をかけられることもなく、謎の人物は街の中心にある噴水広場までやってきた。そして、水に濡れることを全く気にすることなく噴水の中へ入って行く。真ん中に立つ円柱からは花火のように水が噴き出し、滝のように水が流れ落ちている。その人物は全身びしょ濡れになりながら、流れ落ちる水の中に手を突っ込んだ。水の中で何かを探している。と、謎の人物は何かを見つけ、両手で下から上と持ち上げる仕草をした。流れ落ちる水の中には、外からでは分からないレバーがあった。そのレバーを上まで上げると円柱の中から噴水の真下にかけて歯車がかみ合って回転する音が少しの間だけ聞こえてきた。すぐにその音と振動が止まった。

謎の人物は、びしょ濡れのまま噴水の外に出ると、バナナの騎士に捕まった。

「貴様、見かけぬ奴だな。今、そこで何をしていた」

「……」

騎士が声をかけるが、黒装束の人物からは返事がない。

「顔を見せてもらおうか」

と、騎士が謎の人物のフードに手をかけようとした時、広い袖口からキラリと光る鋭利なものが一瞬出て来て、騎士と一閃を画した。

「グッ！ き……さ……ま……」

騎士は白目をむいてその場に倒れ込むと、静かに溢れ出す血が地面を流れて行く。アスワムの民はその光景を目にしても決して驚くことや騒ぐこともない。

謎の人物は、東に向かって通りを進んで行く。この非常事態に気づいた騎士たちが謎の人物に剣を振りかざして立ち向かって、剣は地面に落ち、次々と騎士たちが倒れて行く。それでもアスワムの民は騒がない。人が殺されているというのに民が何も気にしないその光景を見た一人の騎士は、まるで夢を見ているか異世界に紛れ込んでしまったのかと思うほどだった。焦りと恐怖が混ざった感覚に陥っていた。謎の人物に手を出さなければ何もしてこない。自ら立ち向かってくることもなかった。

フロートタウンの東のはずれ、湖面のそばまで謎の人物がやってくると、水中から何か浮かん

でくる影が見える。次第にその影が大きくなっていく。ついに水面に現れた。それは人だった。謎の人物は片膝をつき、手を差しのべた。

「復活の時でございます。新アスワム国王女ドラゴン・マドリカ様！」

マドリカが謎の人物の手を取り、水中からは上がった。少し大人びて背も髪も伸び、しかし、その髪の色はまだら模様で色が落ちてしまっていた。

と、また水面に王妃と使用人の女が浮かび上がってきた。すぐに謎の人物は二人を引き上げた。

「長い間の湖面下の生活、お察しいたします」

三人に頭を下げた謎の人物。

「気にすることはない。これも国を守り、長らえるための役目。少々、マドリカの髪に影響が出てしまいましたが体には問題ないでしょう」

王妃は微笑んで言った。

「御髪がまだら模様になられてもお美しいです」

「……ありがとう」

少し髪のことを気にしていたマドリカだったが、謎に人物にそう言われてはにかんだ。

「民には迷惑をかけた。そして、とうとうこの日が来たのですね」

王妃は空を見上げて赤い月を見た。マドリカは胸の前で両の手を組んで目をつぶり祈るようにひと呼吸した。

「マドリカ様。王女は月闇に現わる赤い影の勇姿を見届ける義務があります」

謎の人物が言うと、マドリカはすうーっと目を開けた。

「——。わかっております」

十三歳となり、もともと瞳の大きい目により強い目力が備わり、王女らしくその言葉には力がこもっていた。

「飛空艇を用意してあります。こちらへ」

謎の人物は三人の前を歩き出した。すると、王女らの登場を待っていたかのようにアスワムの民が通りの両側に立ち並んでいた。それは三年前、ビロウがバンナへ行く時と同じような光景だった。

王女らの姿が見えると通りは、拍手が起こり、王女や王妃の名前を叫ぶ声に包まれた。王女マドリカの凜として容姿に民は口々に、

ご立派に成長されて——。

お美しくなられた——。

ご無事で何より。私はずっと待っていました——。

なんと勇気のいるご決断を——。

などと自由に叫んでいた。その光景を民の後方からバンナの騎士たちが呆気にとられながら眺めていた。民全員が張りつけられたような笑顔ではなく、心の奥から笑みを浮かべて、歩く神を見ているようだった。その状況に騎士たちはその場を鎮める力は湧いてこなかった。自分たちが少しでも力を加えれば、逆に押しつぶされてしまう恐怖を全身で感じていた。

「なんという光景を我々は目にしているのだ。あれだけ探しても見つけれなかったというのに、どうして今になってここに……。すぐにバナナ国に連絡だ」

騎士は部下に伝えた。

しばらくして、このアスワムの出来事がバナナ国に届いた。ピロウは、王の間で今、目の前にいる第参騎士団長トゥルーから聞いた。

「そうか。わかった」

ピロウは目をつぶっておだやかに言った。

「ご無事で何よりでしたね、国王様。しかし、今までどこにおられたのでしょうか。とても健康的な状態だったと聞いておいらしますが……。！」

ピロウは手に持った白い杖を支えにして立ち上がった。リミテッドセブンの花がある隅へと歩き出した。ピロウの目は少し虚ろに見えたトゥルー。

「国王様？」

相も変わらぬ七色の花は、花びらの色を定期的に変えている。その花の前に立ったピロウは、杖を振りかぶる。突然、気が狂ったように杖を振り回して花を散らしていく。打撃を受けた花びらは、ヒラヒラと床へ落ちて行く。それでもピロウは杖を振り回すことをやめない。終いには花瓶を振り落とした。花瓶は床に落ちると割れた。興奮したピロウを背後から羽交い締めするようにトゥルーは押さえ込む。体の大きいトゥルーには簡単だった。

「国王様！ おやめ下さい。いったいどうされたのですか？」

杖を振り回すことをやめたピロウの息は上がっていた。が、今度は床に散った七色の花びらを杖の先で突き刺し、足で何度も踏みつける。そして、言葉にならないようなことを発し始めた。しかし、トゥルーはその言葉を聞き取れず、ただ唸っているようにしか聞こえなかった。

トゥルーは力づくでその場から、王の間の中心に移動した。すると、ピロウは何事もなかったように大人しくなった。呪いの魔法陣でも踏んでしまったのだろうかトゥルーは思った。

「落ち着きましたか、国王様。少しお休みになられた方がよろしいかと……」

トゥルーが優しく声をかけると、

「いや、その必要はない」

と、返事が返ってきた。そして、またピロウは歩き出した。

「国王様！ どちらへ……」

トゥルーはピロウに何が起きているのかさっぱり理解できなかった。また暴れ出すかもしれないと心配しつつピロウの後を追う。着いて来られることに反抗することはなさそうだった。城の中を抜け、中庭にピロウはやって来た。半月の月が照らす外界。ピロウは中庭の中程で立ち止まった。

そして、ピロウは杖の持ち手をひねり、持ち手の中に隠れていた針を何のためらいもなく指に刺した。引き抜くと同時に穴の空いた皮膚から血が湧いて出てくると、杖の中に注ぎ込んだ。すでに杖の中はどす黒くなった血がこぼれるほどにいっぱいだった。月の光りに照らされて、ピロウの指からひたたり落ちる血は赤くとても鮮やかだ。

杖の中の血は表面張力の限界を超え、白い杖の外側を赤い線を引くように流れ落ちて行く。ピロウは杖の持ち手を元に戻すと接合部分から中の血がはみ出るようにこぼれた。ピロウはその杖

を天に向けた。手元から少しずつ細くなっていく杖の先は、半月の月を差していた。

「国王様……」

トゥルーはその様子を見守るほかない。警備に当たっていた他の騎士もその異様な光景が気になりやって来た。

「いったいどうされたのですか？ 今まで夜に出歩かれることはなかったはず……」

「……わからない」

トゥルーはそう答えるしかなかった。すると聞き覚えのある歌が聞こえてくる。ビロウが毎晩歌っていた歌――。夜の警備に当たっていたある騎士は王の歌を覚えたと言って冗談に聞かせるほどバナナ城内では有名になっていた歌。

杖を天に向けたまま、王の歌が終わった。

――。

「……」

「……」

「……」

「……」

花火が打ち上るように、杖の先から赤い光りが城の高さくらいまで一直線に昇っていく。そして、頭上で花火が開くようにその赤い光りが放物線を描いて城を包み込む。降り注ぐ赤い光は、雨のような水滴――杖のなかに溜め込んであった王の血だった。血の落ちた所は赤黒く染まっていた。

ビロウだけでなくその場にいたトゥルーと騎士は全身に浴びてしまっていた。

「国王様、いったい何を……」

トゥルーは駆け寄ってビロウの顔を覗き込むと、その目は白目をむき、

「アスワムを取り戻すのだ」

と、空へ叫んだ。ビロウは意識をなくし、そのまま立ち尽くしていた。

すると、城がカタカタと弱く揺れ始め、次第に揺れは大きくなっていく。城の中から物が倒れたり落ちたりする音が聞こえてきた。

「国王様、ここは危険です。逃げましょう」

今日に限ってブロス是非番だ。しかし、どう考えてもこれは異常事態だ。

「ブロスを呼びに走れ、行け！」

トゥルーと一緒にいた騎士に命令をした。その騎士は「ハッ！」とだけ返事をして城の外へ走って行った。すでに城の中では騒ぎになり、皆が逃げ回っていた。

と、その時――ビロウを中心に地面が四方八方に亀裂が走った。

揺れは続き、分断された地面が互い違いに浮き沈みを始める。そして、いっきに地面が盛り上がる場所もあった。何が起きているのだ。このままでは城は崩れてしまうぞ。トゥルーは最悪の事態を想像していた。

ビロウとトゥルーは激しい揺れでバランスを崩し、倒れ……。

地面の底がいっきに抜けたかのように、中庭を中心に城全体が崩落した。

土煙が舞い、その中に大きな影が現れた。穴の中から何かが大口を開けて出てきた。土煙が風に流されると、そこには巨大なドラゴンがいた。後ろ足で立ち、尾は蛇のように波打っていて、背中には羽が生えている。顎を上下に動かし、その口の中ではガリガリと音をたてて城やがれきを噛み砕いていた。そして、ドラゴンはそれを一気に飲み込んだ。

トゥルーに命を受けた騎士は走りながら背後を見ると城はあとかたもなく、月の光りに照らされた赤いドラゴンだけがいた。

街の民も騒ぎに気づいたのか、家の外に出て、なくなった城の方を見ていた。騎士は走りながら遠くへ逃げるように叫んだ。民はドラゴンを確認するやいなや、あちこちの方向へ逃げて行った。

騎士は、街の東にあるブロスの家に到着した。おかまいなしに家のドアを叩いた。すぐにドアは開いた。

「こんな時間にどうし……その顔はどうしたんだ、お前」

ブロスは、血で染まった騎士の顔を見て訪ねた。すでにその血は乾き黒ずんでいた。すぐにブロスは外の音を耳にして顔つきが変わった。

「何が起きている？ 簡潔に説明してくれ」

騎士は中庭で起きたことを説明するとブロスは、

「そんな馬鹿な。国王様が……。いったいなんのために……」

「全く分かりません。確かにその時の様子は変でしたが……。最後に『アスワム国を取り戻す』と言っておられました」

「バナナ国を滅ぼすつもりで……。今までこんなになるまでバナナ国のことを考えてやってきたのに……。くそ！ 訳が分からない！」

ブロスは家の中に戻り、剣と小さな装備だけを身につけた。そして、エルジェと息子を強く抱きしめた。エルジェはブロスの格好を見てなにが起きているのか理解していた。

「危険を感じたら、逃げろ。必ず戻ってくる」

「必ず……」

エルジェは涙をこぼした。

ブロスと騎士は家を飛び出した。

「先の話だと城の者たちは全滅か……」

逃げ惑う民に逆らって走りながら、ブロスは騎士に聞いた。

「おそらくは……。半分以上の騎士団と魔導士団は城にいたので」

「よりもよって、ググ様が旅立った後に。もし、いてくれたら、上手い対処法を考えられたかもしれないというのに……」

今しがたまであった城の所までくると、ドラゴンは穴を広げるように周囲の地面を喰っていた。それはお腹を減らしてガツガツと食事をしているようにも見える。お腹いっぱいになったのか、喰うことをやめ、羽をばたつかせて穴から出てきた。その穴は、城のあった面積の五倍、いやそれ以上に広がっていた。

「いいか。街の方には行かせるな。気をひかせて何も無い東の海岸へ向かわせよう」

ブ羅斯はそう言いながら剣を抜いた。騎士も返事をして同じように剣を構えたが、手元が震えている。こんな巨大なモンスターを見て平気でいられる方がどうかしているだろうとブ羅斯は思った。

そして、ブ羅斯は懐から赤い色の石を取り出した。それを剣の刃の根元に空いた丸い穴にはめ込んだ。すると剣の周囲に炎が燃え上がる。

「マージン（魔鉱石）は持っているな。何でもいいからはめろ。打撃を加える中で一番効き目のあるものがあれば報告してくれ。他の騎士や魔導士が来るまで耐えろよ。行くぞ！」

「はっ、はい」

周囲の様子を伺っているドラゴンを二人は左右から挟み込むようにして走り出した。ブ羅斯は足首とは思えないほど太いドラゴンの足めがけて、剣を思いっきり振り抜いた。が、鉄のように硬い鱗に剣ははじかれてしまった。

「ファイアマージン（炎魔鉱石）じゃだめか。次はこれだ」

水色のマージンを取り出し、付け替えた。それは『風』の属性を宿した魔鉱石だ。しかし、結果は変わらなかった。

と、ドラゴンが歩き始め、街の方へ進み出した。一步足を出せば、地面に亀裂が走り、二歩進めば、亀裂の入った地面が布団をひっくり返すように簡単にめくれ上がる。

「くそっ！ そっちに行くな！」

数歩歩いただけでこんなめちゃくちゃになるなら、街の中に入れば……。ブ羅斯はそれ以上想像を膨らませたくなかった。ドラゴンの足元にいれば、いつ影響を受けるかわからない。

「ウオー——！」

ブ羅斯は黄色いマージンに替えて、何の躊躇もせず歩くドラゴンの足に剣を振り降ろした。少し手応えを感じたが、分厚い鱗に少し切れ込みを入れた程度だった。他のよりはマシか。ブ羅斯はドラゴンの反対側にいる騎士に叫んだ。

「おい！ サンダーマージンに変更しろ。少し切れ味が増す」

そうこうしているうちに街の中まで入り込んでいた。ドラゴンの近くにいたら、今度こそは破壊されて行く建物の破片やがれきをもろにくらう。安易に近づくことはできなくなってしまった。

突然、ドラゴンの後方から大きな炎の固まりが飛来し、直撃する。もの凄い爆発が起こるがドラゴンには一切効き目がなかった。

「ブ羅斯、待たせた。これはいったいどうなっているんだ」

魔導士団の一人が駆けつけて来た。ブ羅斯は騎士から聞いたことを伝えた。

「それに炎は効かない。サンダー系ならば多少有効かもしれない」

「わかった。やってみよう。守るぞ、民を。国を……」

魔導士は指をピンと立てて、詠唱し始めた。そして、ドラゴンにめがけて勢い良く指差すと、指先から人の胴体の二周りくらいある稲妻がドラゴンに向かって突き進んだ。

ダーナ峠直上に、マドリカから乗せた飛空艇が飛んでいた。甲板から暴れるドラゴンの様子を眺めていた。魔導士による魔法攻撃が有効だとみて、四方八方から攻撃が続けられているが、ドラゴンは弱る様子がない。逆に進み行くことで、ドラゴンは魔導士たちを蹴散らしている。次第に魔法攻撃の数が減っていく。

まだら模様の長い髪をなびかせているマドリカの表情は微笑んでいた。

「なんてお父様はお強いのでしょうか」

マドリカの目はドラゴンに釘付けだった。しかし、その大きな瞳からは涙がこぼれ、ほほを伝いきる前に風に運ばれていく。

「このような形で、地龍（アースワーム）を目覚めさせてしまったのは私のせいでございます。もう少し早く前バンナ国王を……」

と話す黒装束で短い黒髪の男は嘆いた。

「そんなことはありませんよ、アンヘン＝克蘭ダム。ビロウ王のバンナ国の絶対防御を突き破ろうという計画にあなたは最善を尽くしました。そして、この状況もビロウ王が最善を尽くした結果なのです」

王妃が謎の人物アンヘンに言い聞かせ、アンヘンは涙を流しながら頷いた。

「今ここに私が立っているということは、新制アスワム国が始まったのです。三年前、お父様が望んで私たちを湖面下に行くように指示したということは、結果は決まっていたのですよ。そして、私はお父様に、アスワムの民に望まれるべくしてここに立っている……」

マドリカの言葉を聞いてアンヘンは片膝をついた。

「王女マドリカ様。大変ありがたきそのお言葉、まるでビロウ王のドラゴンマウスが宿っているかのようにございました」

バンナの街は、すでに半分以上が壊滅状態になっていた。民がバンナの湖から飛空艇で逃げようとしたにも関わらず、街の様子を見に引き返してきた。ドラゴンより高く飛んでいるので安心しているのだろう。

ドラゴンはその飛空艇に大口を開き、何かを吐き出した。今までに喰った土や石を固めて作った巨大な球だった。それは一直線に飛空艇に向かって行く。途中でその球から炎が上がり球を包み込む。そして、その火の球は飛空艇に直撃した。煙を上げて飛空艇は街の中に落ちて行った。

「さっさと逃げれば良かったものを……」

ブ羅斯は地上から飛空艇が落ちて行くのを見ていた。逃げる一方でブ羅斯の息は上がり、体は限界だった。周囲には騎士や魔導士、民が数多く倒れていた。

――さすがに皆をかばう力はもう俺には残ってないぞ。

――ドラゴンってのは、疲れを知らないのか。

ブ羅斯は物陰でそんなことを思いながら様子を伺っていると、ドラゴンは家々がまだ残る東側に向かい出した。

――待ってくれ。そっちは俺のうちがあるんだ。それに妻と息子が。

この騒ぎでとうに逃げているだろうとブ羅斯は思っていたが、歩みを進めるドラゴンをこのまま行かせる気にはなれなかった。

「くっそー！ そっちには行かせるかぁー」

ブ羅斯は剣を握りしめ、ドラゴンに立ち向かう。後方から飛び跳ね、背中を狙うも剣が突き刺さることはない。はじかれたブ羅斯は着地すると足がよたついた。もう目を開けているのがやっただ。

――。

気づくと目の前にドラゴンの顔、ギョロリとブ羅斯は睨まれた。そして、ドラゴンは唸り声を上げる。それはドラゴンの怒りというよりは、アスワムの民の怒りに感じた。ブ羅斯の頭の中によみがえる場面があった。それはビロウとバンナ国をどうしていくか話し合っている時ではない。それは新人騎士の訓練をしている時ではない。それはエルジェや息子といる時のことではない。

――ああ、若いの、よろしくな。だが、人様の幸せがお主らの幸せになるのかどうか分からんぞ。その幸せに浮かれるんじゃないぞ。老人からの忠告じゃ――

ビロウをバンナに連れて行く途中、フロートタウンで長老と話をした場面だった。

一血計画でアスワムの街には手を出さなかった。それからずっと以前と変わらない生活を保障していた。俺らは、バンナ国は幸せになったし幸せだった。アスワムだって幸せだったじゃないか。それに幸せに浮かれているつもりもなかったが、長老に言われたあの日から今の今までその言葉を思い出すことはなかった。結局、それが幸せに浮かれていたということだったのか。人様の幸せに食らいついたわけじゃない。一緒に人様の幸せを共有させてほしかっただけなんだ。

「もうやめてくれ。今度は自分たちで国を作るから……。アスワムの民の気持ちは痛いほどわかったから……」

ドラゴンは大口を開けると地面をえぐり削るようにブ羅斯を飲み込んだ。

陽が昇り始めるまでドラゴンはバンナ国を破壊し続けていた。バンナ城のすぐ脇を流れていた川の一部がえぐられていて、ドラゴンが最初に現れた穴に川の水が流れ込んでいた。陽が昇り始

めるとドラゴンはその穴に潜り込んで二度と出てくることはなかった。二週間もすると穴に水が溜まり、新しい湖ができていた。

アスワム城の改修工事は急ピッチで進められ、ひと月もかからずにアスワム城は直された。

新しく設けられた月闇の間にて、旧バナナ領をどうするか半月の形をしたテーブルを囲んで話し合いが行われていた。新しく街を作ろうとか、騎士団や魔導士団、新しくできた飛空艇団の訓練場にすべきだとか、話が依然まとまらないでいた。

王女マドリカもその話し合いに同席していた。

「どうせなら、新しくできた八つ目のドラゴンレイクを観光の目玉にしてしまおうとか……」

と、マドリカがあくびをこらえながら言った。すると、周囲の大人たちは、それはいい、さすが王女様などと口をついて出てくる。正直王女は飽き飽きしていた。もっと真剣に言葉を使って欲しい者だとマドリカは思った。

「困っている種族に分け与えてみるのはどうでしょうか……」

と、またマドリカが発言すると反復するように王女を褒め称える言葉が並ぶ。

「しかし、その種族が以前のバナナ国のように攻めてきたりしたら……」

「その時は、騎士団が先頭に立って戦う」

「いやいや、魔導士団が攻めてくる奴らを瞬時に壊滅させてみせましょう。騎士団の出る幕はない」

「聞き捨てならないな。飛空艇団が空からいっきに攻めるのが一番早く片付くと思うが」

「たかが空の運び屋が何を言っている。我々魔導士を乗せて空から敵陣に攻め込めばいい。あんたらは、何かしら運んでいけばいいんだよ」

マドリカは、ため息を一つして椅子から立ち上がった。

「どちらへ、王女様」

「外の空気を吸ってくるわ。皆も少し休んで」

マドリカは城のなかでもアスワムの街を一望できる場所にやって来た。フロートタウン、その先のタウンは人々の行き来が盛んだ。この行ったり来たりしている街を見るのが好きだ。ずっとずっと何事もなく、今の時が永遠に流れるのだとしたら、それ以上の幸せはないのだろう。しかし、この国の民を脅かすような事態があれば、私は容赦しない。

マドリカは、ドラゴンの顔が持ち手に装飾された白い杖を晴れ渡る青い空に向けた。

終わり

ドラゴンマウス ～復活の呪い・覆滅の祈り～

<http://p.booklog.jp/book/44351>

著者：水島一輝

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mizu-c/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44351>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44351>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.